



Title	フィン・ユールの家具に対する評価について：メーカーの変遷を通じて
Author(s)	多田羅, 景太
Citation	デザイン理論. 2025, 86, p. 54-55
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/102492
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

フィン・ユールの家具に対する評価について —メーカーの変遷を通じて

多田羅 景太 京都工芸繊維大学

はじめに

フィン・ユールはデンマークの家具デザイナーの中でも、数々の美しい家具をデザインしたデザイナーとして知られる存在である。現在フィン・ユールがデザインした家具の現行品はワンコレクションによって製造されているが、ニールス・ヴォッダー工房などで過去に製造されたビンテージ品は、オークションハウスやビンテージ品を取り扱う専門業者において高値で取引されている。

また2022年には東京都美術館でフィン・ユールとデンマークの椅子展が開催されたが、これはデンマークのビンテージ家具がプロダクトの範疇を超えて、いわゆる美術品としての側面を持ち始めていることを示唆しているといえよう。

このような状況を踏まえ、本発表ではフィン・ユールの家具が、量産を前提としたプロダクトから美術館で鑑賞される美術品へと変化していった過程を考察する。

家具職人によるフィン・ユールの家具

フィン・ユールとニールス・ヴォッダーとの協力体制が最も充実していた1930年代終盤から1950年代中頃までを二つの時期に分けることができる。前期にあたるのが1937年から1943年であり、この時期には主に張りぐるみのソファーやキャビネットマーカーズギルド展に出品している。一方、後期にあたるのが1944年から1950年代中頃であり、この時期には木製のアームなどを彫刻的に削り出した椅子をデザインしている。

この二つの時期にフィン・ユールがデザインし

た椅子は、加工の手間を要する独特なデザインのため大量量産には向いておらず、当時ニールス・ヴォッダー工房において製作された個体数は限定的なものであった。

アメリカへの進出と量産家具

ニールス・ヴォッダーとの協働によって注目を集めたフィン・ユールであったが、その独特なデザインは一部の保守的な家具職人から批判を浴びた。デンマーク国内の保守的な家具産業に限界を感じていたフィン・ユールは、1950年代に入るとアメリカを舞台に活動するようになる。

フィン・ユールが国際的な名声を大きく高めた業績として挙げられるのが、ニューヨーク国際連合本部の信託統治理事会議場におけるインテリアデザインである。会議場の前方に馬蹄形に配置された会議用デスクに添えられた椅子には、1951年のキャビネットマーカーズギルド展において発表されたアームチェアが採用された。しかしながら地理的に遠く離れ、生産能力にも限界があるデンマークのニールス・ヴォッダー工房ではなく、アメリカのベーカーファニチャーで製造されたアームチェアが納品されている。デンマークの高品質な家具の製造は、伝統的な家具工房において長年培われた木工技術によってのみ可能であるという淡い幻想は、ベーカーファニチャーというアメリカ量産家具メーカーの存在によって搖らぎ始めたのである。デンマークの保守的な家具産業に限界を感じ、アメリカで目の当たりにした近代的な家具産業に手応えを得たフィン・ユールは、デンマー

クでも伝統的な家具工房ではなくフランス＆ダヴァーコセンなど近代的な家具工場へデザインを提供するようになった。

メーカーの変遷と復刻事業

フィン・ユールの家具デザインに対するスタンスは、家具職人による伝統的な家具作りから量産工場における近代的な家具作りへと時代に合わせて変化してきた。代表作のひとつであるチーフティンチェアは1949年の発表以降、ニールス・ヴォッダー工房、イヴァン・シュレクター工房、ニールス・ロス・アナセン工房、ベーカーファニチャーとメーカーを変えながら継続的に製造されてきたが、2002年以降はワンコレクションが製造ライセンスを保有している。

ワンコレクションは2001年のケルン国際家具見本市において、フィン・ユールの初期の代表作であるペリカンチェアとポエトチェアを復刻して注目を集めたが、以降もフィン・ユールによってデザインされた製品のラインアップを充実させていき、2010年頃にはフィン・ユールがデザインした家具を復刻するメーカーとして世界的に認知されるようになった。

フィン・ユールの家具に対する評価

フィン・ユールによる家具はオークションにおいて高額で落札されるケースが多い。これは前述のように、1940年代から50年代を中心にニールス・ヴォッダー工房によって製造された限定的な個体が存在するからであろう。特にニールス・ヴォッダー工房の焼印が押されたモデルは、その希少性の高さから高額で取引されている。

本発表では大手オークションハウスであるサザビーズとクリスティーズに加え、パリに拠点を置くアールキュリアルの落札記録より、フィン・ユールのビンテージ品に関するものを調査し、その中でも落札数の多かったチーフティンチェア、45チェア、53チェア、シルバーテーブルについて表

にまとめた。

以上の調査から、デンマークモダン家具デザインの黄金期に製造されたフィン・ユールの家具が、半世紀以上の年月をかけて現行品を上回る市場価値を得ている状況が明らかになった。これはデンマークのビンテージ家具が一般的な工業製品とは異なり、時間の経過と共にその価値が高まるというベクトルを孕みながら市場に存在していることを表わしている。また、デンマークの家具が美術館で展示される事例が近年増加しているが、これは社会におけるデンマーク家具に対する受容が、従来の消費財から美術品へと変化していることを示唆しているといえよう。

2022年7月23日から10月9日にかけて、東京都美術館ギャラリーA、B、Cにおいてフィン・ユールとデンマークの椅子展が開催された。出展作品の大部分は織田コレクションによって構成されており、デンマークのビンテージ家具が多数展示された。一方で、展示品の全てをビンテージ品で網羅することは困難であったため、現行品も含めた展示となっている。また、展示の後半は、フィン・ユールを含む著名なデンマークの家具デザイナーによってデザインされた椅子の現行品に実際に座ることができる空間として構成された。

結び

一見同じように見えるフィン・ユールの椅子であっても、1940年代にニールス・ヴォッダー工房で製造されたものと、ワンコレクションによる現行品は製造方法が大きく異なり、使用されている木材も異なるケースがある。フィン・ユールとデンマークの椅子展において、ビンテージ品と現行品の両方を展示したことは、結果的にテクノロジーの発展に伴うものづくりの変化を学ぶことにも繋がったのではないだろうか。今後、美術館においてデンマークの家具が展示される機会が増加することが予想されるが、引き続き動向を注視ていきたい。